



校長室だより 24号

中島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【来週の行事】 9月26日(日) 情報処理検定、防衛省試験
29日(水) 進学選考会

- 1 「思い出ずるままに」第6代校長 松元昭巳 20周年記念誌より抜粋
- 2 出逢ったいい話『母からもらった贈り物』 『致知』2004年11月号より抜粋

「思い出ずるままに」(原文) 第6代校長 松元昭巳

創立20周年を心からお祝い申し上げます。私の在任期間は60年から62年にかけてでしたので、僅か2年余しか経過しておりません。目を閉じれば、校内外諸処のたたずまいが浮んできます。職員の方々やPTA・ご協力いただきました数多くの方々のお顔もその殆んどをなぞることができます。

昭和60年4月1日、はじめて校門に入ったとき、生徒諸君が離任式のはじまる前の清掃の時間でした。玄関前の校庭の掃除をしていた数名の男子諸君が「お早うございます」と明るい元気な声で挨拶してくれました。私は一瞬ある種の戸惑いを感じました。生徒達は私が新任の校長であることを、その時点では知る由もない筈です。そこで私は「事務室はどっちかね」と問いかけると、その中の2名が持っていた庭箒を他の友にあずけ、「案内します」と言って事務室まで来て「こちらです」と。その自然でさわやかな姿を目にしたとき、先賢が築き上げてこられた「風紀の振徳」という輝かしい伝統を誇る本校の発展のためには、非才の身とは知りながらも、聊かなりともお役に立たねばと固く決意したのでありました。

61年10月市内4校野球定期戦が始まったことは今は懐かしい思い出となっています。市内の公私立校全部が参加するこの種の大会は日南市だけではないでしょうか。紆余曲折はありましたが、日南市長・市議会議長の暖かいご援助をいただき第1回大会がすばらしい感動の中で開催され、他の3校がブラスバンドでの華かな応援合戦をくりひろげましたが、当時は本校だけ楽器がなく、そろばんをかちゃかちゃやって応援したものでした。その年の卒業生の保護者の方々から卒業記念品として楽器を贈っていただく旨の申し出があったとき、皆様の母校に寄せる真情に心から感服し、本校の向上発展は間違いなしと信念を持ったのでした。

「学べよ青春、鍛えよ青春、歌えよ青春」の校歌のもと立派な人材の輩出を願って止みません。栄ある20周年を機に御校の限りない発展を心から祈念いたします。

出逢ったいい話 『母からもらった贈り物』

児童文学作家：西村滋さんの少年期のお話より

少年は両親の愛情をいっぱいを受けて育てられた。殊に母親の溺愛は近所の物笑いの種になるほどだった。

その母親が姿を消した。庭に造られた粗末な離れ、そこに籠もったのである。結核を病んだのだった。近寄ると周りは注意したが、母恋しさに少年は離れに近寄らずにはいられなかった。

しかし、母親は一変していた。少年を見ると、ありったけの罵声を浴びせた。コップ、お盆、手鏡と手当たり次第に投げつける。青ざめた顔。長く乱れた髪。荒れ狂う姿は鬼だった。少年は次第に母を憎悪するようになった。悲しみに彩られた憎悪だった。

少年6歳の誕生日に母は逝った。「お母さんにお花を」と勧める家政婦のオバサンに、少年は全身で逆らい、決して棺の中を見ようとはしなかった。

父は再婚した。少年は新しい母に愛されようとした。だが、だめだった。父と義母の間に子どもが生まれ、少年はのけ者になる。少年が9歳になって程なく、父が亡くなった。やはり結核だった。

その頃から少年の家出が始まる。公園やお寺が寝場所だった。公衆電話のボックスで体を二つ折りにして寝たこともある。そのたびに警察に保護された。何回目かの家出の時、義母は父が残したものを処分し、家をたたんで蒸発した。

それからの少年は施設を転々とするようになる。13歳の時だった。少年は知多半島の少年院にいた。もういっばしの「札付き」だった。

ある日、少年に奇跡の面会者が現れた。泣いて少年に棺の中の母を見せようとしたあの家政婦のオバサンだった。オバサンはなぜ母が鬼になったのかを話した。

死の床で母はオバサンに言ったのだ。「私は間もなく死にます。あの子は母親を失うのです。

幼い子が母と別れて悲しむのは、優しく愛された記憶があるからです。

憎らしい母なら死んでも悲しまないでしょう。

あの子が新しいお母さんに可愛がってもらうためには、

死んだ母親なんか憎ませておいたほうがいいのです。

そのほうがあの子は幸せになるのです」

少年は話を聞いて呆然とした。

自分はこんなに愛されていたのか。涙がとめどなくこぼれ落ちた。札付きが立ち直ったのはそれからである。

作家・西村滋さんの少年期の話である。

『致知』2004年11月